

韓国の文学 2

純粹詩(絶対詩)、新文学派、超現実主義、生命派、抵抗文学、農民文学、田園派、技巧派、風刺文学、土俗的色彩、戦時体制、民俗文学、青鹿派(自然派)、モダニズム、純粹文学、戦時文学、戦後文学、社会参与文学、伝統主義
産業化時代、農民文学、世代小説、文壇文学、現実参加的性格、人間性回復、連作詩、叙事詩、連作小説、大河長編小説

1. 韓国文学の成熟

国民文学運動はある程度成果があったが、プロ文学は概して 30 年代初めまで持続しながらも、作品の文学的価値よりも階級主義的、目的主義的なところに重点を置いたため、よい作品をほとんど生むことがなかった。

1930 年台に入ってから、プロ文学についてだけではなく、国民文学に対しても拒絶反応のようなものを呈し、さらに新しく純粹な文学を志向する新しい傾向が形成され始めた。

‘純粹詩’という言葉はもとよりフランス文学用語として、非詩的な要素を排除して純粹に詩的な次元に到達した詩を指し示す。絶対的に純粹に詩的な次元に到達しようとしたことから‘絶対詩’とも言う。30 年代の初めからこのような純粹の詩を試みたのは‘詩文学’(1930 年創刊)の同人たち、すなわち‘詩文学派’と呼ばれるパク・ヨンチョル、キムヨンランなどである。そして 20 年代末から海外文学作品の翻訳、紹介を目的として‘海外文学’(1927 年創刊)といった雑誌を通じて活躍した文人たち、いわゆる海外文学派の中に李河潤、金尚容などの詩人たちが詩文学派に協力した。これ以外にも鄭寅普、卞栄魯、新石井、柳致環などの多くの詩人たちが互応して、高い水準の敘情詩が数多く発表された。

その中でも金永郎はよく整えられた韓国語と南道方言を基調にした柔らかい調子、か細い心の穏かな波紋を見せてくれる詩想の敘情詩を発表し、詩集‘永郎詩集’(1935)を出す。金尚容は静かな觀照的な世界を著した初詩集‘望郷’(1939)を出版し、李河潤は敘情の美学溢れた詩集‘水車’(1939)を、新石井は田園的、牧歌的な詩人で初詩集‘蠟燭’(1939)を出版した。

純粹詩を意図しながらも、世界的にファシズムが蔓延し始めたその時代の知識人の不安、焦燥、絶望を反映したような以上の超現実主義的な作品‘꽃나무’(1933)、『오감도’(1934)、『鏡’(1934)などが発表されて注目を集めた。

1935 年頃からは一方で 30 年代前半期の純粹な敘情の世界をより一層深化、拡大させることを意図する‘生命派’が登場した。詩作の中心課題を人間、特にその生命に置いた‘生命派’の主要な詩人としては徐廷柱、柳致環などがある。

この外に李陸士は独立運動家として活躍した詩人で‘青葡萄’(1939),‘絶頂’(1940)など革命家の意志を現わした特異な作品を発表した。

30年代は、小説もその水準が全般的な向上を示すと同時に傾向の多様な展開によって注目をひく。これを傾向別に分類すれば次のとおりである。

まず、30年代に入って日帝の弾圧がさらに過酷になり、これに対応して抵抗の一形態として民族意識を高めるための歴史小説がたくさん書かれた。これは20年代後半に展開された国民文学運動の延長と見なすこともできる。李光洙の‘李舜臣’(1931),‘이차돈의死’(1934),金東仁の‘若い彼ら’(1929),‘雲弦宮の春’(1933),朴鍾和の‘금삼의血’(1936),玄鎮健の‘無影塔’(1938)などがその重要な例である。

次に、農民文学が‘東亜日報’のブナロド運動と係わって本格化した。その運動は東亜日報で学生啓蒙隊を農村に赴かせ、農民を啓蒙させようとした農民運動で、当時には一種の民族主義運動として展開される。

農民文学は概して1935年以後その様相が変わり、田園派文学とも呼ばれるようになった。

詩集として金東鳴の‘芭蕉’(1938),金尙鎔の‘望郷’が代表である。

第三、歴史や社会より文学の芸術性や表現技巧により関心を寄せた李孝石と李箱は芸術派または技巧派と呼ばれた。李孝石は同伴作家であったが1933年以後は人間性の本質を追い求めた敘情的な作品を綴る。李箱は先立って敘述した超現実主義的な詩を書く一方、自意識または無意識の世界を追い求めた心理主義小説‘날개’(1936),‘終生期’などで関心を集めた。

第四、日帝下の植民地体制や社会の不條理に対して抗議または批判を加えることによって風刺文学が形成された。蔡萬植の‘レディーメイド人生’(1934),‘太平天下’(1938),‘치숙’(1938),‘濁流’(1939)のような長、短編が代表的な例である。

第五、作品の芸術性を重視した、土俗的な色彩が強い作品として特に注目をひいた作家に金裕貞、金東里などがある。金裕貞は滑稽的な要素も強い‘金取る大豆畑’(1935),‘봄봄’(1935),‘樁の花’(1936)などを、金東里はシャーマニズムを基調とした‘巫女も’(1936),‘岩’(1936)などを発表した。

この外に作品の芸術性を重視し、同時に現実の問題にも深い関心を示した作家として桂鎔黙、金廷漢がいる。桂鎔黙は‘백치 아다다’(1935)などを、金廷漢は‘沙下村’(1936)などを発表した。

2. 現代文学の停滞と模索

1939年に至り文芸紙‘文章’,‘人文評論’などが創刊されて関心を集めたが、時代はすでに日帝の戦時体制によって暗黒期を迎えるに至る。その年に親日的な朝鮮文人協会が結成され、翌年には‘朝鮮日報’,‘東亜日報’などが廃刊されて、国語パンフレットの出版が全面禁止された。41年には‘文章’,‘人文評論’などの文芸誌も廃刊される。このような変化によって、多数

の文学人はこの期間に作品を書いても隠密にした。作家の中には筆を折り、我が国の文学も暗黒期に入って行く。

8.15 解放を迎え我が国の文学人は活動を再開するに至ったが、今度は南北の対立にり、新しい民族文学の進路を模索しなければならなかった。

詩の部門では 1940 年を前後に、‘文章’を通じて幾人かの新人が登場して注目をひいた。そして暗黒期にも隠密に韓国語で詩作を続けた多くの詩人によって 8.15 解放後には詩文学思想非常に高く評価される重要な詩集が現われた。

第一、20 年代後半に始まった国民文学運動の延長として、そして解放後には左翼のイデオロギー文学に対応する民族文学の一環として、民族主義傾向の強い詩集が刊行された。代表的な例として朴鍾和の ‘청자부’ (1946)、鄭寅普の ‘담원시조’ (1947)、金億の ‘民謡詩集’ (1948) などが挙げられる。新人の時調集としては ‘文章’ を通じて登場した金相玉の ‘草笛’ (1947) が刊行された。このような詩集は概して我が民族固有の情緒がその底流に流れている。

第二、生命と詩人たちの詩集で申石艸の ‘石艸詩集’ (1946)、柳致環の ‘生命の西’ (1947)、リリズム ‘歸蜀途’ (1947) などが刊行された。これらはそれぞれ以前の誌の世界をさらに深化させたもので関心を集めた。

第三、抗日抵抗詩の結晶と評価される二冊の遺稿詩集が刊行された。一つは李陸士の ‘陸士詩集’ (1946) で、その詩人の革命家的な意味がこめられた何編かの佳作が収められている。他の一つは学生 の身で日本で獄死した尹東柱の ‘空と風と星と詩’ (1948) として、亡国人の精神的苦痛を詠じた佳作が収録されている。二人は共に詩人の志士的高潔な精神によって特に感動を与える。

第四、40 年代後半純粹詩の一見本であると同時に、左翼のイデオロギー文学に対応する民族文学の一見本として評価される ‘청록집 (靑鹿集)’ (1946) が刊行された。これは 1940 年を前後して ‘文章’ を通じて登場した 박목월 (朴木月)・조지훈 (趙芝薰)・박두진 (朴斗鎭) 3 人の共同の詩集であるが、これによって 3 人は ‘靑鹿集派’ と呼ばれるようになった。しかし詩の世界はそれぞれ異なっていた。朴木月は民謡的律調で郷土的敘情性が強く、趙芝薰は優雅な調べで回顧的または線的な要素が強い、朴斗鎭は宗教的熱情を基調として理想郷を歌うなど彼らの特性はそれぞれ異なるのものであった。しかし ‘靑鹿集’ を前後して彼らの初期作品は自然を素材にしたものが多く、これをこの 3 人の共通点と見なして ‘自然派’ とも呼ぶ。

第五、30 年代中盤以後のモダニズムを受け継いだ詩人たち、すなわち金瓊麟、朴寅煥、金洙暎などの共通詩集 ‘新しい都市と市民たちの合唱’ (1949) が刊行された。ここに収録された作品はその素材が都市と文明から得られており、視覚的イメージと觀念の調和が意図された点が特色であった。

小説部門では 1939-40 年には金東里によって、解放直後には金東里、趙芝薰などによって純粋文学の理論が展開されて注目をひいた。39-40 年のそれは以前の作家らの多数が非文学的な要素にあまりひかれていたことに対する批判であった。解放直後のそれは左翼のイデオロギー文学理論に対する対抗する批判であったと言える。そのような中であって新しい作家も多数登場し、韓国の小説文学はより新しい様相を帯びるに至った。

3. 現代文学の新局面

韓国の現代文学は 8.15 解放以後、何年かの間新しい民族文学の進路を模索しなければならない重大な課題を抱くようになる。しかしそれに伴う必要な期間は 6.25 の勃発によって十分に与えられることができなくなる。多数の文学人は従軍作家団や記者団または政訓将校として従軍し、所謂戦時文学が形成され、引き継いで戦後文学が形成されることになる。

戦後文学は 60 年代を経て 70 年代にも韓国の文学に大きな比重を占めるが 6.25 以後の政治的社会的混乱に対して敏感に応じて現実参加を意図する傾向が生まれた。このような戦後文学や参加文学とは異なり我が民族固有の情緒を基底とした生き方は伝統主義的な傾向が生まれたりした。

まず戦争に従軍した詩人たちの中で、柳致環の詩集『歩兵と共に』(1951)、金宗文の詩集『壁』(1952)、そして趙芝薰の『다부원에서』(1951)を初めとした多くの作品が戦線で直接取材した点が高く評価される。

伝統主義的な傾向を代表する詩人としては徐廷柱、朴在森、そして金相玉などの詩調詩を挙げることができる。

小説部門ではまず、戦線を背景とした作品に朴栄濬の短編集『陰になった花園』(1953)に収録されたいくつかの作品と黄順元の『鶴』(1953)、金東里の『興南撤収』(1955)などの代表作である。戦争を素材にした作品は 50 年代後半以後、多様に使われて、中編や長編もかなりの数にのぼる。

現実参加意識が反映した代表的な例は金廷漢の『모래톱 이야기』(1966)、『人間団地』(1970)、金聲翰の『방향』(1956)、吳尙源の『謀反』(1958)、李浩哲の『닿아지는 살들』(1962)などである。

純粋性を追及した例としては吳永壽の『갯마을』(1953)、한무숙の『石』(1955)、『感情がある深淵』(1957)、康信哉の『若いけやき』(1960)などである。

このような 6.25 以後の小説文学においては、西欧の実存主義(existentialism)の影響が上の戦後文学に特に影響を与えたことと、広く心理主義表現技法が採用されたこと、そして中編と長編が際だって増加したことなどが重要な現象として指摘されうる。

4. 産業化時代の文学

8.15 解放と朝鮮戦争(6.25)の大きい難しさを勝ち抜いた韓国人たちは以後分断状況の中で近代的な民族国家を樹立しなければならないという時代的使命を担うこととなった。このような使命は政治的成熟と経済発展という二種類の大きな課題を抱かせた。しかしこの二つの課題は矛盾した過程を経て、達成することができた。経済発展は強力な軍部独裁権力が主導した経済開発計画によって成就することができたし、反対に政治的成熟はそういう経済発展を可能にした独裁権力との絶え間ない闘争の結果成り立ったのだ。

非暴力平和デモで李承晩独裁権力を押し倒した 1960 年 4.19 革命は政治的民主化のための第一歩だった。だが 4.19 革命がまもなく社会安定と経済発展を運んでこなかったし、1961 年 5.16 クーデターを通じて、執権した朴正熙軍事独裁政権は 1962 年第一次経済開発 5 ヶ年計画を始め強力で国家が主導する経済開発を推進した。1970 年代以後韓国社会は急激な産業化の過程に入ることになる。

このような社会変化は肯定的な面だけでなく否定的である面も持っていた。産業化により経済が急成長して近代的な産業体制が確立され、農業にだけ主に依存した産業構造の多様化は暮らしの姿も多様に変化させた。近代的産業の育成により都市が拡大して大衆文化が広がった。だが、短期間にあまりにも大きな変化を起こそうとしたため社会葛藤が高まったことも事実である。

4.19 革命と 5.16 クーデターなどたゆまざる闘争と変化を通して政治的成熟と経済発展といった二つの成果を得ることができた。

このような社会変化は肯定的な面だけではなく否定的な面も併せもっていた。産業化によって経済が急成長し、近代的な産業体制が確立された、農業にだけ主として依存していた産業構造の多様化は生きかたにも多様な変化をもたらした。近代的産業の育成によって都市が広がり、大衆文化が拡散した。しかし、短期間にあまりにも大きな変化を起こそうとしたため社会葛藤が高まったことも事実である。都市労働階層は不合理な労働条件を受け入れるしかなかった。農業が徐々に経済の中心から後退し農村は都市に比べて疎外され始めた。そして徐々に都市と農村との格差が広がった。産業化の力強い推進と分断状況のため北朝鮮の安保脅威に対立するための必要性のため、政治権力はますます力強い独裁体制を備えていったし、政治的な部門だけではなく社会秩序全般において国民の自由が制限された。

産業化時代の文学は当時社会の矛盾を文学的に現わし、解決策に悩みつつ成長していった。この時期には大衆文化が拡散して社会が多様化することより新しく多様な文学人が登場し、新しい主題意識と新しい表現技法が試されて文学の幅が広がった。そして大衆読者層が広がるにつれて文学出版が活発になり文学の社会的影響力が大きくなった。文学が社会批判的機能を積極的に遂行しながら民主化運動の中心となった。疲弊しゆく農村の現実、都市労働者たちの貧しく希望のない生きかたを扱いつつ文学も観念的性格から脱して現実の生に密着していった。また一方では社会と個人の中で、一

方では個人の内面意識においていかなるものが真の人間らしい生きかたであり、我々が追求しなければならぬものであるのかという点に思いを馳せることになった。

1970年代現実参加文学の重要な流れの中の一つは農民文学である。農村は急激な産業化過程で工業優先の政策によって疎外されて、次第に遅れをとっていった。これに伴う農民の問題が社会的関心事として提起されつつ、文学の重要な対象となった。小説では이문구(イ・ムング), 韓勝源, 박영환(朴・ヨンハン), 송기숙(ソン・キスク), 김춘복(キム・チュンボク)などの作家が代表的である。

李文求は短編小説‘雌牛’(1970),小説集‘館村(クアンチョン)随筆’(1977),‘으악새 우는 사연’(1978),‘私たちの町’(1981)等の作品を通じて、農村の急な変貌と伝統秩序の瓦解過程、農民らの窮乏した暮らしの姿などを弾力のあるユーモアな文体で形象化している。ハン・スンウォンは小説集‘앞산도 첩첩하고’(1977),‘不正娘’(1983),‘入り江’(1984)等の作品を通じて、産業化や近代化と関係がない土俗的な情緒と空間、その中に住んでいる人々の恨みの多い人生と粘り強い生命力を描き出した。朴ヨンハンは‘왕릉일가’(1988)で都市文物の浸透に農村文化が徐々に破壊されていく過程をユーモアをもって描き出した。詩としては申庚林の詩集‘濃霧’(1973),江西‘南漢江(ナムハンガン)’(1987)が代表的であるが、申庚林はこの詩集で産業化過程で疎外された農民らの人生(暮らし)の現場を写實的に描いて出した。

参加文学のまた他の主要な素材は都市郊外の下層民や労働者らの生活であった。これらは大部分農村を離れて、都市に出てきた離農民らとして都市の日用労働者に転落した人々である。小説では1970年代に黃皙暎, 초·세히, 尹興吉などの作家が代表的であり、1980年代には梁貴子, 칸·소크리ョン, 유·스ngh, 김·윤hyonなどの作家が代表的だ。黃皙暎は‘異郷’(1971), ‘ラクダの目玉’(1972), ‘韓氏年代記’(1972), ‘織織玉手’(1973), ‘散歩行く道’(1973), ‘商売の夢’(1973)等の作品を通じて、近代化の過程で疎外された人々が自分のアイデンティティを喪失し破壊されていく過程を描いている。초·세히は連作小説‘小人が打ち上げた小さい球’(1976)で抑えられて踏みにじられた階層の人生の姿と彼らを踏みにじる不道德な社会構造を告発した。尹興吉は‘九足の靴で残った男’(1977), ‘直線と曲線’(1977), ‘青白い中年’(1977)等の連作でわい曲された産業化が招いた社会的矛盾を批判的見解で捕らえている。

1980年代は梁貴子が‘원미동の人々’(1987)で郊外に住む庶民の生の哀歎を密度深く描いた。また労働運動が本格化し、労働文学に対する論議も活発になり姜碩慶の‘林の中の部屋’(1985), 유순하の‘生成’(1988), 金寧炫の‘月見草’(1989), 방현석の‘새벽출정’(1989), 김향숙の‘氷壁の草’(1989)などが発表された。

産業化時代小説の重要な傾向の一つとして世相小説が上げられる。최일남(崔イルナム), 박완서(朴ワンソ)の作品らとその良い例となる。崔イルナムは作品集‘ソウルの人達’(1975), ‘たわ

ごと’(1977)等の作品を通じて、産業化過程で疎外された庶民層の人生の哀歎、彼らの故郷の農村の変化の姿などを諷刺的な言語で描いた。박완서(朴ワンソ)は‘나무’(1970),‘さまよう午後’(1978),‘都市の凶年’(1979)等の小説集で1970年代ソウルの姿を通じて、中産層小市民の物質主義的欲求と虚偽意識を批判的に描いた。

分断問題は産業化時代にも相変わらず重要な文学の素材であった。1970年代は1972年7.4南北共同声明など南北対話が活気を帯びる一方で分断状況が長期化し、南北分断がこのまま固着化されるかも知れないとの不安感が高まり始めた時代であった。また少年期に朝鮮戦争を体験した世代が文壇に登壇した。したがって個人的体験の再現を土台にして、分断体制によって毀損された民族共同体の回復を指向する文学が現れることになったが、その一つの分岐は家族構造の破壊と血縁意識のき損を問題視したいわゆる‘離散文学’の傾向で、他の分岐はイデオロギー問題に対する批判的認識を土台にイデオロギーによって破壊された民族意識の再認識を追求する傾向である。尹興吉の‘梅雨’(1973),キム・ウォンイルの‘闇の魂’(1973),田相國の‘アベの家族’(1979),文淳太の‘つつじ祭’(1981)李ムンニョルの‘英雄時代’(1984),キム・ウォンイルの‘幻滅を探して’(1983),趙廷來の‘火遊び’(1983),‘大白山脈’(1989),‘アリラン’(1995),玄基榮(현기영)の‘スニ叔父’(1978),朴ワンソの‘ママの杭’(1982),‘その年冬は暖かったよ’(1983),キム・ジュョンの‘雷の音’(1986)等が代表的である。

現実参加的性格の文学は詩壇では金芝河,高銀,チョ・テイル,李始榮,鄭喜盛,キム・ミョンス,クァク・ジェグ,キム・ヨンテク,崔ハリム,イ・ソンプ,朴ノへ,などの詩人たちによって、民衆詩として現れた。金芝河は譚詩‘五賊’(1970),詩集‘渴望で’(1982),‘대설 남 1.2.3’(1985)等の作品で権威に対する不正,不正に対する風刺と批判,不条理な現実に対する抵抗意志などを新しい表現様式を通じて形象化した。

一方では独裁政治の閉鎖性と産業化の波の中で毀損されていく人間の生を回復させようとする試みが生じた。詩の領域では김태준(キム・テジュン)の‘몸 바뀐 사람들(からだ変わった人々)’(1978),‘마음이 불어가는 쪽(心が吹いていく側)’(1987),김명인의‘東豆川(トンドウチョン)’(1979),‘遙かに遠いところスワニ’(1988) 이태수의‘憂鬱な非常の夢’(1982),キム・グァンギョの‘私たちが濡らす最後の夢’(1979),‘違ってそうではない’(1983),‘愚かな輩のように’(1988),以下席の‘透明な中’(1980),‘金氏の横顔’(1984),李ソンボクの‘ごろごろする石はいつ目覚めるのか’(1980),‘南海錦山(クムサン)’(1987),荒地友情‘鳥も亡くなるんだな’(1983),‘カニの目の中のレンゲ’(1990),イ・ユンテクの‘市民’(1983),‘ダンサーの話’(1987),朴ナムチョルの‘地上の人間’(1984),崔昇浩の‘大雪注意報’(1983),‘世俗都市の楽しみ’(1990),若い男日の‘ハンバーガーに対する瞑想’(1987)などが代表的である。小説においてこのような傾向をよく示した作家はイ・チョンジュンなのに,‘うわさの壁’(1971),‘残忍な都市’(1978)等の作品で真実と自由が抑圧される現実世界の矛盾を冷静にとらえた。

産業化時代の文学はその主題意識の側面だけでなく技法の多様化もまた成就した。小説では 조선작, 조해일, 한수산などが大衆小説作家として文学享有層を拡大するのに寄与した。また 이문열は幅広い素材を多様な技法で形象化して‘人の息子’(1979), ‘野牛’(1979), ‘皇帝のため’(1980), ‘あなた再び故郷に行くことができないだろう’(1980), ‘若い日の肖像’(1981), ‘金翅鳥’(1983), ‘英雄時代’(1984), ‘私たちのゆがんだ英雄’(1987), ‘九老(クロ)アリラン’(1987), ‘変更’(1989), ‘容認’(1990)等この時代文壇を代表する数多くの作品を発表した。その他にも‘無機質青年’(1981)のキム・ウォンウ, ‘만다라’(1979), ‘彼岸の鳥’(1981)のキム・ソンドン, ‘라하트우ハレレプ’(1985), ‘야하ヴェの夜’(1986)の造成期, ‘遠いソンバガン’(1978), ‘人間の明け方’(1980)の朴ヨンハン, ‘トヌアの愛’(1983), ‘猿はない’(1989)のユン後名, ‘お父さんの土地’(1984)のイム・チョルウ, ‘悲鳴を探して’(1987)のボク・コイル, ‘所持’(1987)の이창동(イ・チャンドン), ‘永遠の帝国’(1994)の이인화(李インホア), ‘은어釣り通信’(1994)の윤대녕(ユン・デニョン)など新しい小説の可能性を探求した多くの作家がいる。

詩においても言語と形式の多様な実験を通じて、産業化時代の新しい詩的美学を試みた作家らがたくさん登場した。황동규(ファン・ドンギョ), 정현중(鄭ヒョンジョン), 김·윤·테, 오·큐·우·온, 이·스·문, 오·세·ヨン, 理由頃, 이建青, 李スイック, 김·ジョン·へ, チョン·ジンギョ, 박제천(パク・ジェチョン)などが代表的である。

主要作品ではファン・ドンギョの詩集‘三男に降る雪’(1975), ‘私は輪を見れば転がしたくなる’(1978), ‘風葬’(1984), ‘耐えられない軽い存在ら’(1988), 鄭ヒョンジョンの詩集‘私は特別おじさん’(1978), 오·세·ヨンの詩集‘反乱する光’(1970), ‘最も暗い日夕方に’(1982), 이建青の詩集‘姫昔ヨモギ花一つ’(1983), 剝製川の詩集‘壮者時’(1975)等がある。

特に 1980 年代には既存の詩的形態を破壊した前衛的で実験的な詩と民謡のように民衆らの生活像を散文的な表現に表わした詩がたくさん現れた。先述したように連作詩, 叙事詩, 大作詩の創作も産業化時代の文学が示す多様な実験と試みの結果である。

産業化時代の小説が持つもう一つの重要な特徴は連作小説と大河長編小説が大挙登場したという点だ。連作小説では前に述べた李文求の‘館村(クァンチョン)随筆’(1977), ‘私たちの町内’(1981), チョ・セヒの‘小人が打ち上げた小さい球’(1978), ムンスン胎衣‘チン音’(1979), ‘水車の中に’(1981), 李ムンニョルの‘若い日の肖像’(1981), 朴ワンスの‘ママの杭’(1982)等が代表的であり, その他にソ・キウオンの‘馬鹿熱戦’(1972), 崔仁勳の‘総督の声’(1976), ハン・スンウォンの‘不正娘’(1983), 全商国の‘道’(1985), 移動下衣‘暴力研究’(1987), 崔仁浩の‘家族’(1987), 김·ヒャンスクの‘網の間で’(1988), ヒョン・キロンの‘私たちの時代の熱戦’(1988), 叙情人の‘dalkung’(1988), 崔スチョルの‘鯨腹の中で’(1989)等がある。大河長編小説は主に歴史小説らなのに先立って調べた朴景利の‘土地’, 黄皙暎の‘張吉山(チャンギルサン)’, 김·ジュョンの‘客主’, ムンスン胎衣‘燃え上がる川’,

朴ワンソの‘迷妄’他にイ・ビョンジュの‘智異山(チリサン)’,趙廷來の‘太白(テベク)山脈’,‘アリラン’,
‘金城漢の’壬辰倭乱(文祿の役)’,李ムンニョルの’変更’,崔仁浩の’常道’などがある。

この時代は女流作家らの活動が著しい時期でもある。小説家では박완서(朴婉緒), 박경리(朴景利), 오·ジョンヒ, 노·ヨンウン, 김·첸우온, 칸·ソクリョン, 윤·ジョン모, 김·マノク, 김·インスク, 김·ヒャンスク, 양귀자(ヤン・クイジャ), 신경숙(シン・ギョンスク), 오정희(吳貞姬)など数多くの女流作家らが産業化時代から今日に至るまで韓国文壇の中心を導いていっている。박완서(朴婉緒)の‘さまよう午後’(1978), ‘都市の凶年’(1979), ‘ママの杭’(1982), ‘迷妄’(1990), 김·첸우온の‘綠色帽子’(1979), ‘愛妻は’(1984), ‘冬のファン’(1989), 오정희(吳貞姬)の小説集‘火の河’(1977), ‘幼年の庭’(1981), ‘風の魂’(1986)等はこれらの代表作である。

詩壇でも허영자(ホ・ヨンジャ), 유안진(ユ・アンジン), 姜桂淳(カン・ゲスン), 칸·ウンギョ, 코·ジョンヒなどを中心に女流作家らの活動が活発だった。허영자(ホ・ヨンジャ)の‘가슴엔듯 눈엔듯(カスメン ドゥッヌネンドゥッ)’(1966), ‘親展’(1971), ‘美しさはどうして花だけか’(1977), 유안진(ユ・アンジン)の‘月ハ’(1970), ‘絶望詩編’(1972), ‘翼服’(1978), 姜桂淳(カン・ゲスン)の‘姜桂淳詩集’(1975), ‘揺れる冬’(1982), 칸·ウン教義‘虛無集’(1971), ‘貧者日記’(1977), ‘声集’(1982), 코·ジョンヒの‘招魂祭’(1983), ‘この時代のアベを’(1983), ‘智異山(チリサン)の春’(1987)等の代表作がある。

1. 1930年代を代表する文学傾向にはどんなものがありますか?
2. 1930年代以後現実参加派と純粹文学派の論争が続きました.二つの文学派の傾向と代表作家,作品に関して話してみましよう.
3. 産業化時代文学が共通に追求した目標は何ですか?
4. 産業化時代文学の代表的な傾向にはどんな事がありますか?
5. 提示された作品の中から一つを選んで,感想を述べてみましよう.

この時間では韓国文学2について学習しました。

次の時間では伝統文化について学習します。

お疲れ様でした。